

14. 病理診断報告書の確認忘れ防止の為の取り組み

病理を担当する技師が明日からできること
検査技術部

- 1) 姫路赤十字病院 検査技術部,
 - 2) 同 病理診断科, 3) 同 臨床検査科
- 永谷 たみ¹⁾ 秋久 克樹¹⁾
廣尾 嘉樹¹⁾ 井上 瞳¹⁾
春名 勝也¹⁾ 山本 繁秀¹⁾
伏見聡一郎²⁾ 堀田真智子²⁾
和仁 洋治^{1) 3)}

【はじめに】

病理診断報告書の確認忘れによる医療事故を無くすための新たな取り組みを行い、効果が得られたので報告する。

【目的】

病理診断科から報告される病理組織診断報告書、細胞診断報告書の陽性・陰性にかかわらず全例において、検査依頼から3ヶ月後に結果が閲覧されていないものを0とすることを目的とした。

【方法】

- 依頼から3ヶ月後、未閲覧の症例を抽出、リストを作成し、依頼科の部長と検査依頼医師に伝える。
- リストには、症例ごとに考えられる未閲覧要因を記載する。
- 医師に、病理診断報告書未閲覧症例の抽出、リストの作成方法を説明する。

【結果】

開始時、未閲覧件数89件（内科25、婦人科18、外科16）であった。開始後7ヶ月で未閲覧件数が0件となった。

【考察】

未閲覧症例を検索・抽出する仕組みを医師らに周知してもらうこと、病理側でも漏れがないかチェックすること、未閲覧となった要因を考察し、医師に伝えることが確認忘れ防止に重要である。

15. 当院で開始した肺癌に対するロボット支援胸腔鏡下手術（RATS）について

呼吸器外科

水谷 尚雄 田尾 裕之

当院、呼吸器外科は2019年7月から中播磨・西播磨で最初に肺癌に対するロボット支援胸腔鏡下手術（Robot-assisted thoracoscopic surgery；RATS）を導入することができた。RATSが実施できる施設が限られていることもあり、学会などでもその利点については十分論議できないのが実情である。当院のロボット手術の豊富な経験に大いに助けられながらRATSを導入するまでの過程や、通常の胸腔鏡下手術であるVATSとの違い、導入後の実際などについて報告する。

16. 1型糖尿病診療における、当院で採用しているデバイスのまとめ

小児科

○中迫 正祥 河南 幸乃
清水 彩香 藪下 広樹
仲嶋 健吾 山根 弘美
吉井 拓真 吉本 啓修
寺崎 英佑 藤原 絢子
坂田 千恵 黒川 大輔
神吉 直宙 上村 裕保
中川 卓 高見 勇一
柄川 剛 藤田 秀樹
五百蔵智明 久呉 真章

1921年にインスリンが発見され、1型糖尿病は不治の病ではなくなり、インスリン製剤やインスリン注射器や自己血糖測定機器などの医療技術が進歩した。近年においては、治療としてインスリンポンプ、血糖管理として連続グルコースモニタリングなどテクノロジーの進歩も目覚ましく、患者の選択できるデバイスの組み合わせが増えている。最新デバイスの導入された患者を診る際には、全ての医療従事者がそのデバイスを知っておく必要がある。今回、当院で採用している1型糖尿病デバイスの仕組みと